

ニュースレター 目次

1. 第37回セミナー（赤谷）開催のお知らせ	1-5
2. 第37回セミナー（赤谷）事前勉強会のお知らせ	5
3. 「環境社会学・修士論文発表会」報告	6
4. 事務局から	8
【重要】メールマガジン配信に関するお願い	8

1. 第37回セミナー（赤谷）のお知らせ

2008年の春の第37回セミナーは、下記のように地域住民・NGO・行政機関による国有林の共同管理プロジェクトが進む、群馬県みなかみ町「赤谷の森」で行うことになりましたので、お知らせします。

なお、セミナー時のベビー・シッティングは、「セミナー時におけるベビーシッターの取り扱い」（ニュースレター第38号／通算43号）に基づきます。詳細情報は、参加申込者に追ってお知らせします。

【日時】2008年6月6日（金）～8日（日）

【場所】群馬県利根郡みなかみ町：みなかみ町役場新治支所、猿ヶ京温泉長生館他

【テーマ】生物多様性と地域社会，行政，NGO，研究者の協働

【開催主旨】

群馬県みなかみ町の国有林「赤谷の森」では、2004年3月に財団法人日本自然保護協会と林野庁関東森林管理局が締結した協定にもとづき、「三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画（赤谷プロジェクト）」が実施されています。

赤谷プロジェクトは、約1万ヘクタール（10km四方）の国有林を、10年単位の協定によって、地域住民、NGO、行政機関が共同管理する日本初の試みです。規模の大きさ、期間の長さだけでなく、地域住民で組織する地域協議会と日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局がコアセクター（中核団体）となり、森のあるべき将来像を合意した上でそれを森林計画に反映させています。

共同管理の体制を整えた上で、プロジェクトは「生物多様性復元」と「持続的な地域社会づくり」を二大目的に、上述のコアセクターと研究者・市民サポーターが協働して、自然環境のモニタリング調査、スギ・カラマツ人工林の自然林への復元実験、日本初の治山ダム撤去による溪流環境修復計画、教育活動・地域づくり・エコツーリズムのための旧街道網の復活などに取り組んでいます。

このプロジェクトを支えているのは、①1990年代、同地でリゾート開発とダム開発計画をめぐる住民運動を経験した、自然湧出の温泉を観光資源とするみなかみ町新治地区の地域住民、②かつて地域住民と共に自然保護運動を展開し、プロジェクトの企画・総合事務局を務める日本自然保護協会、③人工林の自然林への復元や治山ダムの撤去など、新たな取り組みにチャレンジする林野庁の現場スタッフ、④研究者・市民サポーターらの、日々の協働です。そして、この輪に、環境社会学会会員が複数名関与

しています。

発足から5年、進行中のプロジェクトですが、地域住民・NGO・行政機関と研究者による地域環境管理の意思決定や協働のありよう、各地で進む自然再生の動きとの比較、国有林野行政の今後、自然保護運動と地域社会の新たな関係等、環境社会学会が考えるべき論点がふんだんに盛り込まれています。環境社会学の研究戦略・実践戦略を「赤谷の森」という現場で考えるセミナーにしたいと思います。

【参加申し込み・期限】

なるべく電子メールにて、5月24日（土）までにお申し込みください。

氏名、所属、住所、電話番号、ファクス番号、メールアドレス、参加区分（一般／院生）、性別（男／女）、宿泊（6日泊、7日泊の有無）、懇親会（参加する／参加しない）、希望エクスカーション名（第1希望 [] / 第2希望 []、参加しない）、託児所（利用する／利用しない）

以上の項目をご記入の上、

akayaforest@nifty.com

までメール送付願います。もしくは、ニューズレター同封の申し込みハガキにて、お申し込みください。

【スケジュール（予定）】

6月6日（金）

17:00 受付開始（猿ヶ京温泉長生館）

19:30 各種委員会

20:00 オープニング・セッション

6月7日（土）

8:45～ エクスカーション（バス発：長生館）

13:00～ 総会（みなかみ町役場新治支所）

14:00～17:00 自由報告（みなかみ町役場新治支所）

18:30～ 懇親会（猿ヶ京温泉長生館）

20:30～ 朝まで討論会

6月8日（日）

9:30～12:30 シンポジウム（みなかみ町役場新治支所）

終了後解散

【アクセス】

6月6日（金） 17:25 に上越新幹線「上毛高原駅」（東京駅 15:52 発 Max たにかわ 417号）
（越後湯沢駅 17:05 発 Max たにかわ 420号）

17:15 に上越線「後閑駅」

にご集合いただいた場合は、宿までの送迎バスがあります。

※これ以外の時間は、路線バス等を利用いただきます。

【参加費】

一般会員 27,000～28,000円程度、学生・院生は 24,000～25,000円程度

※宿泊費2泊分、エクスカーション代、懇親会費、7日昼食代を含みます。上記は全日程参加の場合の参加費です。宿泊数などにより参加費が変わることがあります。

【エクスカージョン】

赤谷プロジェクトでは「生物多様性復元」と「持続的な地域社会づくり」を目的に、1万ヘクタールの広大な森で様々な事業が進んでいます。以下に予定する4つのコースを通じて、赤谷の森の来歴をつかむとともに、プロジェクトがめざす森の多面的な将来像について考えていきます。

(1) 「自然湧出温泉の価値に支えられる自然保護活動」コース（定員 28 名）

1990年代、「赤谷の森」のある新治村（当時）北部ではスキーリゾート開発計画、川古ダム開発計画と、それに対応する形で住民によって結成された自然保護活動が展開されていました。両計画ともに2000年に中止となりましたが、地域社会が経験した自然保護活動は、赤谷プロジェクトのそもそものきっかけといえます。

このコースでは、「赤谷の森」からの恵みである自然湧出の温泉源と水源があり、クマタカの生息エリアとなっている法師・ムタコ沢エリアを体験し、秘湯「法師温泉」を拠点に、当時から自然保護活動に携わってきた方々（現・赤谷プロジェクト地域協議会メンバー）に、地域住民が大規模開発から何を守りたかったのかを語っていただきます。

(2) 「旧街道網を活用する教育・研修・観光拠点づくり」コース（定員 28 名）

「赤谷の森」には、江戸時代には江戸と越後とを結ぶ交通の要所として繁栄した「旧三国街道」が今も残されています。一部はブナの自然林に囲まれたハイキングコースとしてすでに活用されていますが、赤谷プロジェクトでは、旧三国街道エリアに網の目のように残る歩道を、教育・研修・観光の拠点「フットパス網」として整備することとしています。

このコースでは、三国峠周辺の旧街道を散策し、「赤谷の森」に残るブナの自然林を間近に体験しつつ、エコツーリズムの拠点をめざして「フットパス網計画」にとりくむ方々のお話を聞きます。心地よい自然林を散策できるコースです。また、越後からの米輸送の中継地として繁栄した「永井宿」にある郷土資料館を訪れ、往時の様子を学びます。

(3) 「赤谷の森林施業史と自然林再生の試み」コース（定員 28 名）

国有林である「赤谷の森」では、1960年前後からの拡大造林政策によってスギやカラマツの人工林が増加しました。現在では約1万ヘクタールの面積の3割が人工林です。それら人工林の多くは間伐・収穫の時期を迎え、収穫後に跡地をどのような森林にしていくべきかが問われています。赤谷プロジェクトでは、本来の高い自然性を維持すべきとするエリアで、人工林を伐採した跡地を自然林に再生するための試験を進めています。

このコースでは、自然林再生の実験地のある小出俣エリアを体験し、「赤谷の森」における森林施業の歴史と、赤谷プロジェクトが進める森林管理、自然林再生の試みについて解説を受けます。

(4) 「全国初・治山ダム撤去による溪流の生物多様性復元」コース（定員 28 名）

2007年2月、赤谷プロジェクトは、全国で初めて、治山ダムを撤去することによって、溪流環境の生物多様性復元を進めることを決定しました。この前例のないとりくみを、昭和20～50年代にかけて17基の治山ダムが建造された茂倉沢エリア（全長約3km）で進めています。

このコースでは、赤谷プロジェクトで溪流環境の生物多様性復元にとりくむ方々の案内で、治山ダム撤去を計画する茂倉沢を体験していただき、赤谷の森での治山事業の歴史と、これからの治山と溪流環境保全のあり方、治山ダム撤去という手段に至るまでの経過について解説を受けます。

【自由報告 2008 年 6 月 7 日】

■分科会 A：環境保全の理念と方法 司会＝牧野厚史（琵琶湖博物館）

- A1. 森を守れ——神社合祀反対運動を展開した南方熊楠の主張
橋爪博幸（桐生大学）
- A2. 原発立地空間に生きる鎮守の森——長島・田ノ浦の生物多様性と地域社会の改変を通して
早瀬利博（長崎大学）
- A3. 保全行政の成立要因の分析
森下直紀（立命館大学大学院）
- A4. 「かわり指標」による生態系の文化サービス評価とモニタリング
——地域住民の声と知を政策につなぐために
二宮咲子（東京大学大学院／（株）環境管理センター環境基礎研究所）
- A5. 集合的記憶の形成を通じた住民による文化景観創造活動の展開——香川県直島を事例として
宮本結佳（奈良女子大学大学院）

■分科会 B：環境と地域社会 司会＝土屋雄一郎（京都教育大学）

- B1. 屋久島のサバ節加工の消長にみる伝統的生業の持続性
王智弘（東京大学大学院）
- B2. それでもそこで暮らし続けるためには——原子力施設立地地域における住民の生活技法
山室敦嗣（福岡工業大学）
- B3. ため池の池干し慣行の存続・再開の意義と実現性——兵庫県東播磨・北播磨地域を事例に
今田美穂（国立環境研究所）
- B4. 村主導の自然再生——滋賀県東近江市大塚の溜め池にみる自然再生の論理
楊平（琵琶湖県立博物館）
- B5. 山村被災集落への帰村条件としての「先祖の土地」
——中越地震被災集落・新潟圏旧山古志村榎木集落の帰村者の実践から
植田今日子（筑波大学）

■分科会 C：環境政策をめぐって司会＝菊地直樹（兵庫県立大学）

- C1. 長良川河口堰問題における運動と科学——1970年代と1990年代の比較を通じて
立石裕二（東京大学大学院）
- C2. 環境教育における行政と市民の協働——庄内川の水辺体験学習を事例として
秋山幸子（名古屋大学大学院）
- C3. 斜里町におけるエゾシカ保護管理の展開
今榮博司（北海道大学大学院）
- C4. 護るために殺す？——スポーツハンティングの可能性と問題
安田章人（京都大学大学院）

【シンポジウム 2008 年 6 月 8 日】**テーマ「生物多様性と地域社会、行政、NGO、研究者の協働」**

エクスカッションでは、赤谷の森の各地で「生物多様性復元」と「持続的な地域社会」をキーワードに、多岐にわたる活動が進んでいることを実感いただけるとと思います。シンポジウムでは、赤谷プロジェクトに地域住民、林野行政、研究者の立場から関与する4名のパネリスト（林泉さん、河合進さん、林野庁関東森林管理局、亀山章さん）と、各地の自然再生事業の理念と枠組みを検証されている鬼頭秀一さんに登壇していただき、多様な主体の協働の枠組み（自然再生協議会等の既存制度に拠らない独自の意思決定と事業の枠組みがなぜ成立したのか）、協働を支える「生物多様性復元」と「持続的な地域社会」という理念のありようなどについて検討を深めます。

司会：茅野恒秀（日本自然保護協会／法政大学大学院）

パネラー（予定）

林 泉（赤谷プロジェクト地域協議会／川古温泉浜屋旅館）

河合 進（元新治村助役／国土交通省選定「観光カリスマ」）

林野庁関東森林管理局（調整中）

亀山 章（東京農工大学／赤谷・自然環境モニタリング会議）

コメンテーター

鬼頭秀一（東京大学）

【第 37 回セミナー事務局】

セミナー実行委員：茅野恒秀（事務局長）、菊地直樹、嵯峨創平、土屋俊幸、丸山康司、宮内泰介（自由報告担当）、研究活動委員会

問い合わせ先：茅野恒秀（日本自然保護協会／法政大学大学院）

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル 2F

財団法人日本自然保護協会

TEL 03-3553-4107 FAX 03-3553-0139 E-mail: chino@nacsj.or.jp

2. 第 37 回セミナー（赤谷）事前勉強会のお知らせ

第 37 回セミナー開催にあたって、赤谷プロジェクト（三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画）の概要を共有する事前勉強会を開催します。本プロジェクトは、2004 年 3 月に発足した進行中のプロジェクトであるため、単行本に類する概略的資料がまだありません。このため、事前勉強会の形式で、プロジェクトに関する情報の不足を補いたいと考えています。セミナーへ参加される方々はふるってご参加ください。

記

日時：5 月 25 日（日）14：00～16：30（予定）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー7階 0705 室

<http://www.hosei.ac.jp/hosei/campus/annai/ichigaya/campusmap.html>

報告「(仮) 赤谷プロジェクトの取り組み」

報告者：茅野恒秀（日本自然保護協会／法政大学大学院）

3. 2007年度環境社会学・修士論文発表会（特別研究例会）の報告

2007年度修士論文発表会（特別研究例会）報告 箕浦一哉（山梨県立大学）

2007年度の修士論文発表会は、キャンパスプラザ京都にて2008年3月8日に行われました。今回7回目となる修士論文発表会は、2001年度に関東地区研究例会として初めて開催され、2003年度からは特別研究例会として開催されてきたものです。

今回は昨年を上回る8件の報告のお申し込みがあり、10:30から16:30までを3部に分けたプログラム構成で実施しました。当日の発表会には約40名が参加し、活発な議論が行われました。また、終了後の懇親会にも参加者の半数が参加し、議論や交流を深めました。

下記のプログラムからわかる通り、発表された修士論文の研究テーマ・方法論は多様で、それぞれに意欲的な研究成果が報告されました。ここでは個々の内容には踏み込みませんが、多くの発表において議論された点をごく大まかに、(1)調査的的確さ、(2)分析的的確さ、の2点に集約してご報告します。

(1)については、事実関係の不明点についての確認や、別の角度からの調査の可能性の指摘など、多くの発表においてフロアから質問や助言がなされ、発表者の今後の研究に大いに参考になったものと思います。また、限られた持ち時間の中で論文の全体像を示そうとするあまり、事例の細部が省略されてしまい、その結果全体像がうまく伝わらない、という報告も散見されました。データを適切に示して説得的な報告をする技術を学んでいただきたいと思います。

(2)については、報告された事例を分析するための視点について幅広い助言がフロアからなされました。また、一部の報告では、既存の分析枠組みをやや単純に適用したとみられるものがあり、そうした報告については、その枠組みを用いる必然性についての議論や、その枠組みを批判的に発展させるための視点が指摘されました。

今回の報告の中には環境社会学とのつながりがやや薄いと思われるものがありました。会の性格上そうした報告が含まれることはやむをえませんし、学会の裾野を広げるためにはそのような報告も積極的に認めていくべきだとも考えられますが、一方で報告時には環境社会学の先行研究とのつながりを示すように促すのが望ましいかもしれません。

以上、課題と思われる点を中心に述べましたが、発表者にとっては幅広い視点に触れることのできる有意義な機会となったと言えます。また、長谷川会長は閉会のあいさつで、このような研究会は、発表者や院生だけでなく、指導する立場にある者にとっても大いに意味があるものである、と述べられました。発表者の方々ははじめ、ご参加下さった皆さまのご協力に心から感謝申し上げます。

なお支出費用は、会場費20,750円、アルバイト代16,000円、飲み物代1,659円の合計38,409円で、すべて環境社会学会から補助をいただきましたので、あわせてご報告申し上げます。

現在、研究活動委員会ではセミナー等の行事の見直しを進めており、修士論文発表会のあり方も含めて検討中です。何かお考えをお持ちの会員の皆さまは、ご意見を最寄りの研究活動委員もしくは学会事務局までお寄せいただければ幸いです。（文責・箕浦一哉）

- ・日時：2008年3月8日（土）10:30～16:30
- ・場所：キャンパスプラザ京都 4階第4講義室
- ・企画担当：箕浦一哉（山梨県立大学）＋秋津元輝（京都大学）

【プログラム】

●第1部（10:35～11:45） 司会＝荒川康（兵庫県立大学）

小障子正喜（滋賀大学大学院）

日本のディープ・エコロジー —前田俊彦の環境思想—

佐藤悠（法政大学大学院）

人的資本が生み出す里山の公益

— 図師小野路歴史環境保全地域における伝統的技法を用いた里山保全活動の実践から—

●第2部 (12:40～14:25) 司会=足立重和 (愛知教育大学)

米良重人 (山梨大学大学院)

地域福祉における市民の参加と連帯 —NPO 法人 MOMO を事例に—

矢澤和河 (北海道大学大学院)

森林 NPO がとった砂利採取事業への無回答の意味 —北海道白老町における森林 NPO の活動から—

宇田和子 (法政大学大学院)

カネミ油症事件における行政組織の問題放置のメカニズム

●第3部 (14:35～16:20) 司会=帯谷博明 (奈良女子大学)

佐久間香子 (北海道大学大学院)

ボルネオ島中央部における森と人の社会空間 —自然資源をめぐるブラワンとプナンの関係誌—

森明香 (一橋大学大学院)

ダム計画をめぐる生活史 —積み重ねられた時間を聴く—

平井勇介 (早稲田大学大学院)

生活実践からみた自然再生事業の環境社会学的考察

2007 年度修士論文発表会 印象記 宮本結佳 (奈良女子大学大学院)

3月8日に開催された2007年度環境社会学・修士論文発表会は、比較的小規模であったものの、NPO関係者など多様なオーディエンスの参加があった。そして参加者の多様性を反映し、それぞれの問題関心に応じた活発な質問が報告者に投げかけられた点が印象的であった。

報告者の方からも同様の発言があったが、普段研究報告を行うことのできる限られた範囲（所属ゼミや所属大学の学内研究会など）を超えた、このような場での発表の中で、思いがけない新たな視点からの質問に応えるという体験は、報告者自身の「問いを鍛える」ことにつながっていくと思う。この点は、修士論文で選択した研究テーマをさらに深めて行く際の鍵となる部分であろう。そういった意味では、今回の報告会で、これまで論文を通じてしか知ることのできなかつた先生方から直接コメントをいただくという貴重な機会を得た報告者も多かったのではないかと思う。

また、研究報告のテーマという点では、フィールド調査を基本として、分析対象の資料を詳細に提示するタイプの発表が中心であった。このようなテーマ設定の中で、オーディエンス側にとっては初めて聞くものであるフィールドの状況を短時間でどれだけイメージしてもらえるようなプレゼンテーションを行うのか、また報告者自身の問題関心を、限られた時間・紙幅の中でどれだけ端的に示すことができるか、という点がオーディエンスと報告者との間で今後につながる発展的な議論を行うことができるかどうかのポイントとなるように思えた。

質疑応答において、フィールドのデータに関する基礎事実の確認に時間がかかってしまったり、問題関心を改めて確認することに労力がかかってしまうことで、今後の論文執筆などに向けた深い議論に入る前に時間切れとなることがある。この点は、私自身が報告を行う際にも常に課題となる部分であり、修士論文報告会に参加させていただいたことで改めてこの課題を再認識した。

限られた時間の中でフィールドの状況をなるべく理解してもらうためには今後、パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトのさらなる活用が重要となるであろうし、事前に複数の方からチェックをしてもらうなどの作業も必要となるのではないかと考えている。

そして、こういった研究例会において重要な機能を果たすものとして、例会終了後の懇親会がある。今回も、報告時間内に十分議論することのできなかつた論点などについて、懇親会の場で報告者・オー

ディエンスが活発に話しあい、時にはオーディエンスが質問の意図などについて詳細にフォローする様子が散見された。

今回、多くのみずみずしい発表から、自らの研究姿勢について振り返り、改めて考える機会を与えていただいた。このような機会を与えてくださった報告者ならびに企画運営者のみなさまに感謝申し上げます。

4. 事務局から

4-1 新入会員の紹介 (2008年2月～2008年4月承認分, 10名, 五十音順)

- (院) 朝山慎一郎 (あさやま しんいちろう) 東北大学大学院環境科学研究科博士前期課程
- (院) 宇田和子 (うだ かずこ) 法政大学大学院政策科学研究科政策科学専攻博士後期課程
- (院) 宇田川飛鳥 (うだがわ あすか) 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程
- (正) 大島堅一 (おおしま けんいち) 立命館大学国際関係学部
- (正) 奥 敬一 (おく ひろかず) (独) 森林総合研究所
- (正) 菅沼祐一 (すがぬま ゆういち) 株式会社野村総合研究所
- (院) 梶本歩美 (すぎもと あゆみ) 東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程
- (院) 目黒紀夫 (めぐろ としお) 東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻国際森林環境学研究室
- (院) 安田圭奈江 (やすだ かなえ) 大阪市立大学大学院経営学研究科後期博士課程
- (院) 山口治男 (やまぐち はるお) 神戸大学国際協力研究科博士後期課程

4-2 退会 (3名)

似田貝香門, 大山一義, 渡辺大記

4-3 【重要】メールマガジン配信に関するお願い

配信したメールマガジンが宛先不明で戻ってくる件数がとても多いので、近日、宛先不明のメールアドレスの整理をする予定です。そこで、**メールマガジン 116号 (2008/5/1 発行) が届いていない方で、今後もメールマガジンの配信を希望される方は**、配信先のメールアドレスを学会事務局に連絡して下さい。その際、メールの件名を「環境社会学会メールアドレス」と付けて送信して下さい。

『環境社会学会ニューズレター』

第46号 (通号51号)

発行日: 2008年5月16日

●
JAES Newsletter

No.46

May 16, 2008

●
編集・発行: 環境社会学会事務局
〒194-0298 東京都町田市相原町 4342
法政大学社会学部 堀川三郎研究室気付

Tel: 042-783-2427

E-mail: office@jaes.jp

郵便振替口座: 00530-8-4016

口座名: 環境社会学会

<http://www.jaes.jp/>

版下作成: 森久聡 (法政大学大学院) 印刷: 榎相模プリント